

人類の繁栄とロータリー運動

国際ロータリー第 2680 地区パストガバナー 中村 尚義(洲本)

「成功を手に出出来ない人たちは 自分の欲望をまったく犠牲にしていない人たちです。もし成功を願うならば、それ相当の自己犠牲を払わなくてはなりません。大きな成功を願うならば、この上なく大きな犠牲を払わなければいけないのです」

これはイギリスの格言ですが、ジェームス・アレン(1864.11.28～1912 年イギリスの作家・哲学者。自己啓発書と詩。『原因と結果』)の現代に残る名言です。アレンはロータリーの創始者・ポール・ハリスより少し前に生まれていますがほぼ同世代と言えるでしょうか。この成功を Profit(利益)に、犠牲を Service(奉仕)に置き換えたら、ロータリーの第 2 モットー「He (One) Profits Most Who Serves Best 最もよく奉仕するもの最も多く報いられる」と意味していることは同じ言葉で同義語と言えるでしょう。日本の古典には「積善の家に余慶あり、積不善の家に余殃あり」があります。

“Service above Self”は更に 1 番目の標語として現在のロータリー活動の中核となっていますが、これには、イギリスの伝統文化が滲んでいます。武士道の精神の反映される言葉で、I Serveに通じます。日本では、石門心学の「先義後利」また、天台宗・書写山の大樹住職は「忘己利他;己を忘れ、他者を利するは慈悲の極みなり」と言い表しています。アメリカ生まれのロータリーの精神(理念)が必ずしも特別なものではないことが分かります。洋の東西を問わず、時代を超えての「人間の心理」だと云えます。自分の欲望を抑えること、即ち自分の利益を少し後に考え他者の利益との調和を図る、そうすることによって、幸せな社会生活を全うできると云っているのだと思います。

ロータリーはいろいろなカテゴリー(範疇)のなかでこれらを考え、日常の生活に適用する、極めて誠実な実践的な哲学といえます。

人類の歴史は、霊長類時代はとも角、今の人類(新人類)は 20 万年前、少なくとも 10 万年前には物と物の交換が始まっていたといわれています。物々交換がはじまり、世の中は大きく変化・進化していきます。また、1 万年前には 1000 万人未満だった人類の人口は、今世紀の半ばには 100 億人近くまで増えていることであろう、といわれています。そういう背景で、今日の話のタイトルを「人類の繁栄とロータリー運動」としました。人類の繁栄とは大きく出ましたが意味はご理解頂けると思います。

ロータリーの目的(綱領)の主文;ロータリーの目的は、意義有る事業の基礎として奉仕の理念(Ideal of Service)を奨励し・・・とあります。他人のために何かをすること、他人のニーズを充たすことを自己の責務として行なうことです。事業の成功を願う(結果)なら、自分のことを後にすること(原因)がなければならぬ。これをやったらなんぼ儲かるなんて、浅ましい考えで仕事をするな、ということです。言葉では理解できますが、いざとなるとかなり大変なことです。

宇宙工学の大家、糸川英夫博士が「どういうとき、一番幸せを感じますか?」という質問に、「自分のためにやった事が人のためになり、人のためにやった事が自分のためになる。こういうときに一番幸せを感じますね」ということでした。さすがそこには、仕事に対する積極的な取り組み方を感じることができます。これも、ロータリー運動の一節ではないでしょうか。

職業奉仕は別の表現を借りれば、ちょっと難しくなりますが、「職業を通して社会のニーズをほぼ完全な形で満たせるよう努力を重ねる。それによって、自己の職業の品位と道德水準を高め、社会から尊重される存在にすることが出来るのです。同業者にも同じ事を勧めます。私たちが真のロータリアンであるか否かは、私たち自身とその職場が社会の模範となるように努力することを、自己の責務と考えているか否かにかかっているのです。(ロータリー辞典より)」となります。

「人は受け取ることよりも、与えることの方が、はるかに大きな喜びを手にする事が出来る」これも、先ほどのアレンの名言ですが、奉仕の理想の一面を述べた言葉と言えます。こういったことを例会などあらゆる機会に学ぶところにロータリー運動の意義があります。私も色々な団体に所属していますが、ここまでやってくれる団体はありません。ロータリーは本当に良いところだと思います。自分を啓発させてくれます。ロータリー理論・Service の概念を追求するには、職業奉仕論が一番適しているのではないかと思います。

さて、このロータリー運動(職業奉仕)と人類の繁栄の関係はどこにあるのか。ロータリー運動(職業奉仕)の根っこは「徳の形成」あるいは「徳の支配」という言葉で表現されることが多いようですが、「徳の形成」が窺えるのは5万年も前からだそうです。ロータリーの根幹をなす(職業奉仕的)考え方や行動は(当時の物々交換を商売・職業と考えていたかどうかは別として)その物々交換と信頼の規則において「徳の形成」が5万年も前からあったとは驚くばかりです。どういことでしょうか。交換には物と物の交換だけではなくアイデアの交換があります。この交換は、権力や腕力による場合もあったが、それより「調和」のとれた交換の方が長続きすることが分かった。双方の良好な関係は良質な物を創り出し、交換は分業を生み、交易を生んだ。交換は交配と進化し分業は更に専門化していきます。

丘や山で捕れた獣の肉や野菜は海の幸・魚介と交換された。より鋭い銛(もり)も獣の骨で作られ、より収穫量も増えた。やがては鐵を使う。山での獲物と海での収穫物は交換されそれぞれが分業することで量と質が向上していく。一方、女は恒常的に獲得できる農作物(デンプン質)の栽培を仕事とし、男は獲物を追う(タンパク質)。毎日の狩りで獲物が無くとも、食料にはこと欠かなくなった。そのように男と女の分業することにより生活の安定を図っていったのです。

このような技術革新あるいは社会において加速度的にイノベーションを起こしているのは、活発化するアイデアの交換です。ロータリーの例会も、もともとアイデアの交換の場であります。アイデアを与える側にも、アイデアを受ける側も徳の形成がなされなければならない。今日で云うロータリー理論そのものです。ロータリーは互惠主義からアイデアの交換に発展していきますが、この思想の基本にあるのが“Service above Self”徳の形成を例会の中で養っていきます。例会出席の重要性はここにあり。単に、連絡機能で終わってはなりません。そういうクラブに発展させた初期ロータリアンは大したもの。ここがロータリーのひと味違うところでしょうか。他の奉仕団体ではまねが出来ないところでしょう。でも残念ながら、これらを十分に理解し、仕事に適用している会員がどの程度あるだろうか。しかも、職業奉仕も言葉だけで、「ロータリーは職業奉仕さえしていればそれで良いのだ」となると、なおさらが悪い。

話は戻りますが、ロータリーの例会はアイデアの交換の場であった。人類史上、当然(当たり前)のことだと思います。相互扶助のみのロータリーだったらとくにその役割は終わっていたでしょう。

ところが、最近、アイデアの交換がなされているのは職業上の事よりもむしろ、地域社会や国際社会への取り組みに対する奉仕のリソースとして行われている場合が多いように思われます。例会等でのアイデアの交換は自らの職業を未来永劫、繁栄させるために重要な意味があるのですが、ひょっとしたら、日本のロータリアンの減少はここに起因しているかもしれない。これで良いのかどうかは議論を俟つところですね。

米国第3代大統領・トーマス・ジェファーソンは、「私のアイデアに共鳴して受け入れる者があっても、私のアイデアは減るわけではない。それは私のローソクから火を貰う者があっても、私のローソクが減らないのと同じだ」といっています。イノベーターの仕事とは「共有」することなのだ。例えば、自転車を誰かに与えたら、自分には残っていない。けれども自転車のアイデアを誰かに与えても、それは自分に残る。自転車は多くの部品の組み合わせで作られる。その各部品は分業によりより優れたもの

に変わっていきます。自転車も発明されたときより今の方がはるかに快適で丈夫であるに違いない。アイデアの交換と分業は今日の繁栄をもたらしました。蛇足ですが、繁栄を謳歌した1950年代より暮らし向きが悪化した地域を見つけるのは難しい、といわれています。この半世紀の間に、1人当たりの実質所得がわずかでも減った国は6つ(アフガニスタン、ハイチ、コンゴ、リベリア、シェラニオネ、ソマリア)、平均寿命が縮んだ国は3つ(ロシア、スワジランド、ジンバブエ)しかなく、乳児生存率が下がった国は1つもない。

ロータリーの職業奉仕論の中に「アイデアの共有」という言葉が出てくるが、これは繁栄の理にかなっている。18世紀のイギリスの産業革命は目覚ましいものがありました。イギリスは自国の繁栄のために、1774年、機械輸出禁止令を出しました。ところが、1843年には廃止しています。それからの近隣諸国の繁栄は2005年の調査では、発明から最初の模倣製品が現れるまでの時間は、1895年の33年から1975年の3年にまで着実に減少している。最近ではもっと短縮しているでしょう。

ロータリー奉仕論の核をなす「利己と利他の調和」は交換や分業の原則からすれば、ロータリーの専売特許でないことが分かる(5万年も前からあったのだから)。ところがこれをロータリーの中に持ち込んだ事はロータリーの繁栄に繋がっていったと推測しても過言ではない。毎週一回の例会を人生の道場と位置付け、大企業の社長も小さな店主もお互いの職業を認め合いアイデアの交換やそれによる人格の形成に努めた。

ところが、最近ではロータリーの本質的なことがクラブで語られなくなった。実に寂しいものです。そういうロータリーを面白くないと思っている人も大勢いる。地区はどのような活動をしていったら良いのかアイデアを下さい。

Exchange of Idea(アイデアの交換あるいは交配)の基本は愛です。ロータリー活動の基本も「愛」です。創始者・ポール・ハリスは会員の資格として、「誰であれ人を愛する人は、ロータリアンになるポテンシャル、可能性がある」と云い、パウロはコリント前書のなかに、「山を動かすような信仰があっても、身体を信仰の為に投げ出しても、もし愛がなければ無に等しい」と記述しています。そして孔子は、「人にして仁ならずんば、礼をいかにせん。人にして仁ならずんば、樂をいかにせん」と。東洋も西洋も「愛」を基本にしていることが分かります。

ギリシャ語には、英語にもない微妙な(愛)の四つの形態を表す言葉があるといひます。第一:ストルゲー(家族の愛)。第二:エロース(男女の性愛・お返しを期待する愛)。第三:フィリア(友情などに見出されるような最も真実で自然な優しい愛情)。第四の愛:アガペー(くじくことのできない慈悲、打ち破ることのできない善意、を意味する)。第三までの愛は、いわば感情の移入が簡単に行われ得るもので、子供はかわいいし恋人は好きでたまらない。親しい友人に親愛感を持つのも、水が低きにつくように自然であります。ところが、「汝の敵を愛せ」という部分の愛は、敵を好きになって愛せよと言ったのではない。意志をもって自然の情に反して「理性の愛」を持ってと言ったのです。このアガペーの愛に限り、相手から感謝されることを期待できません。相手に対して憎しみを持つことなく、「くじかれることのない慈悲と善意」をもって、相手のために一番いいことをしようとする。ロータリーにおける真の意味の愛は、このアガペーの愛をおいて他にない。私たち日本人には比較的苦手な愛ですが、ロータリーから学ぶこの(愛)、心に留めておきたいものです。

最後になりました。考える者、行動しなければならぬ。職業奉仕は2つの面で捉えることができます。一つは今まで述べた、企業、経営者そして従業者が持つ職業倫理からみた経営としての見方。もう一つは、職業を持たない人あるいは持てない人のための奉仕活動です。仕事を通じて人類は尊厳

のある暮らしを立てることが出来ます。また、社会を構成する人々が、各自の才能と意欲を最大限に発揮すれば、社会は大きく成長します。

ロータリーの職業奉仕は、1つはロータリーの中だけではなくて、他の職業人とのネットワークを広げアイデアを交配することが出来ます。2つは求職者に対してキャリア相談も出来ます。3つは若者達への進路指導も出来ます。これらはみな、国際ロータリー(RI)が提唱している項目です。その高度なプログラムの1つはVTT(職業研修チーム)です。これも、RIの新しい取り組みです。従来のGSE(グループスタディ交換)より進化しています。

人は後世に何を遺して逝けるのか。清き金かそれとも事業か、本を書き(著述をし)思想を残すことか。それとも教育者となって学問を伝えることか。しかし何人にも遺すことができる最大の遺物がある。それはその人らしい生涯を送ることである、と明治の思想家・宗教家である内村鑑三は説く。

私たちが職業人として成功するために、そしてロータリー活動をより良い方向に導くためには愛と明晰さと勇気が必要です。ロータリーの活動は主体性を持たなければ何も見えてきません。これから先も人類はどんどん繁栄していきます。良い形でその繁栄を導くためにはロータリアンの叡智とエネルギーを必要としています。